
風

草薙刃

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風

【Nコード】

N5828D

【作者名】

草薙刃

【あらすじ】

海が見たい、と彼女は言った。聖なる海とサンシャイン。夕暮れ時、二人の男と女の瞳に映るものは……。

海が見たい、と突然言い出したのは俺の隣で静かに眠っている彼女。

勿論、さる理由から追われる身となっている彼女は、とてもそんな呑気なことが出来るような立場ではない。にもかかわらずそう漏らしたのだ。

しかし、それを聞いた俺は、何故か断ることなど思いもせず、ふと気がつけば海までやって来ていた。

もしも、今になって理由を付けるとすれば、それは海に行きたいと彼女が言った際に見せた、儂げな笑みの所為だったのかもしれない。

季節と時間の所為か、眼前に広がる海は風の音が時折微かに聞こえる以外は静かだった。

秋の海は、潮の匂いも波の音も何処か遠い。もしかすると、騒がしかった夏がみんな持つて行ってしまったのかもしれない。

初めて見るような気分。

ともすれば、そこに広がるのはただの海ではなく、別の何かとさえ感じられる。

加えて、聖なる海の方こう、水平線へと沈もうとする夕陽の光が、視界を朱色に染め上げる。

空が昏い。

昼でも夜でもない時。この瞬間の世界は何故だろうか、酷く脆いように思えてしまう。

今にも世界が崩壊してしまいそんな印象をも受ける魔性の時刻。逢魔ヶ刻。

昼が夜に変わる時、世界は一旦の死を迎えるのだろうか。

だとしたら、今、この世界は生きるのを止めて死んでいるに違いなかった。

「沈むね」

その言葉が出てくるまで、彼女はずっと黙って海を見ていた。

「綺麗だね」とは結局言わなかった。普通ならば、そんな言葉が漏れてもおかしくないだけの景色がそこにはあるにもかかわらず。

「ああ」

思考の渦に嵌まっていた俺が返せたのは、我ながら実に間の抜けた返事だった。

「このまま、時が止まってしまえばいいのにね……」

いつものように、「ドラマじゃないんだから」とは返せなかった。その言葉が意味することに気付いてしまったから。

彼女は黙ったまま砂浜を抜け、防波堤の先端へと歩を進める。俺は彼女よりも前に歩み出て、海を見据え彼女に背を向ける。

「こんな終わり方なんて、悲し過ぎるな」

口から出た言葉は、意識はしたつもりはなかったが、まるで溜め息のようになってしまう。

視線の先にある夕陽が眩しかった。ずっと見ていたら、涙が出てくるんじゃないだろうかと錯覚するほどに。

長年連れ添った感覚は、彼女の一動作までをもはつきりと脳へと伝えてくる。

「悪いとは、思っているわ……」

彼女は俺に拳銃を向けていた。

グロック26。普段から拳銃を身体の一部とするプロではない彼女であっても、この距離なら急所を外しはすまい。

それと同時に、俺は脇に吊ってあるSOCOM Mk23を意識していた。

「謝ることはないさ。もしかしたら、初めからこうなる運命だったのかもしれない」

勿論、そんなこと微塵も思っていない。だが、「何故？」とい

う質問は実に陳腐だ。もしも訊いたところで、俺の心が求める答えは返って来ないだろう。

「私、もう歩けなくなってたみたい。誰よりも速く、誰よりも長く走り続けようとして、いつの間にか歩き方を忘れてしまったのかな……」

その視線はきつと俺を見ていないだろう。まるで、一番聞かせたい相手は自分だというかのように語っているから。

そんな背後の彼女が、いったい今どんな顔をしているのか、俺には分かってしまった。

きつと今にも泣き出しそうな顔をしている。もしかしたら、もう泣いているのかもしれない。

泣いているなら、その涙を指先で拭ってやりたかった。彼女に、涙は似合わないから。

だが、それは叶わぬ願いだろう。そんな時間はないし、何より彼女の決意を鈍らせることになる。

「ねえ、聞いて欲しいの。信じてもらえないかもしれないけど」

不意に吹く風が強くなった。それに伴って、波もその揺らぎを増す。

「私、アナタのこと好きだった」

付き合いは三年になるだろうか。初めてそう言ってくれたな、そう俺は思った。

少し、空が暗くなってきた。

あと僅かな時間で、世界はまた動き出してしまふ。彼女のシンデレラタイムも、ここで終わりを告げる。

だから、魔法が解けるその前に　伝えよう、俺も。彼女への想いを。

「アナタは、どうだった？」

その言葉を合図に、俺は背後を振り返る。右手には抜き払ったSCOM。

銃口と銃口が向き合う刹那、俺と彼女の眼が合った。

夕陽を受けて輝く鳶色の瞳。そこに浮かぶ涙は、様々な感情が入り交じっているようだった。

「俺も貴女を、誰よりも愛していたよ」

瞬間、打ち寄せた波が大きな音を立てて砕けた。

夕陽が沈み、辺りには夜の帳が降りてくる。

同時に、空葉莢がひとつ。

足元のコンクリートを叩き、物悲しく乾いた音を奏でる。いつしか風は、吹き止んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5828d/>

風

2010年10月11日16時24分発行